軽度の抑うつ状態における性格特性形容詞の自己関連付け評価¹

京都女子大学 鳥丸佐知子²

Self-referent rating of personality trait adjectives in mild depression

Sachiko Torimaru (Department of Psychology, Faculty of Letters, Kyoto Women's University, Imakumano, Higashiyama-ku, Kyoto 605-0926)

The purpose of this study was to examine whether those who were mildly depressed and those who were not differed in terms of their self-referent processing of personal information. Twenty-four undergraduates, 12 mildly depressed and 12 normal controls, performed two types of rating tasks, structural and self-referent, on personality adjectives. The adjectives were either related to depression or not. Immediately after the rating tasks, subjects recalled as many adjectives as possible in an incidental memory task. Main results were as follows: (1) The mildly depressed showed longer response latency than the controls in making self-referent ratings, but no difference in latency was found for structural ratings. (2) Both mildly depressed and normal controls recalled more adjectives for the self-referent rating task than the structural one, and recalled more adjectives that were not related to depression than those that were.

Key words: mild depression, self-referent rating, self-schema.

Markus (1977) は個人の“過去経験に由来する自己に関する認知的概括物”で“自己関連の情報を体制化して導くもの”をセルフスキーマという概念で言い表した。個人には各々自分をとらえるのに一番重要だと思ふ特定の次元が存在し、それがこのセルフスキーマの中核になるという。たとえば、Markus の実験では“独立性-依存性”の次元をセルフスキーマの中核とみなしている個人に対して、独立-依存に関連する特性形容詞が自分にあてはまるか否かを判断させた。その結果、肯定反応の反応時間が他の次元に比べて短かった。つまり中核となる特定次元のスキーマは、他の次元のスキーマに比べてアクセスしやすい状態になっていると示唆した。また Rogers, Kuiper, & Kirker (1977) は、呈示された特性形容詞の文字の形態を判断する形態処理、共通の韻をふむか否かを判断する音韻処理、意味が同じか否かを判断する意味処理に加えて、新たにその特性が自分にあてはまるか否かを判断する自己関連付け処理条件を被験者に課し、これら4条件における反応時間・偶発記憶の成績を比較した。その結果、反応時間は自己関連付け処理がもっとも長く、偶発再生成績についても他のいずれの処理よりも

すぐれるという自己関連付け効果を実証した。その理由として、人は自分自身について十分に構造化された強力なスキーマをもっている。そのため、符号化の際、自己に関してあらかじめもっている豊富な知識と結びつけるような精緻な処理が行われ、セルフスキーマの活性化により、確かな記憶痕跡が生じると解釈した。一方、精神病理学領域において、臨床場面における治療や予防という観点から、うつ病者の認知傾向に関する研究もさかに行われている。従来抑うつの本質は感情の障害であって、認知、動機付け、行動の障害や生物学的な症状は二次的なものと考えられていた。これに対して Beck (1976 大野訳, 1990) は、抑うつの本質は認知の障害であって、感情の障害はそこから二次的に生じるものである、つまり抑うつ感情は抑うつ的なものの見方から生じてくるものなので、抑うつ的な認知を変えることで抑えることができると考えた。そして、うつ病者はそのような否定的なセルフスキーマをもつために、自己に関連した情報について否定的にとらえやすく、ネガティブな情報を取り入れやすいのではないかとした。

これらの研究を受けたかたちで Derry & Kuiper (1981) は、うつ病者、うつでない精神病患者、健康者の3群を対象にうつ内容、非うつ内容の特性形容詞を取り交ぜたりストを呈示し、形態処理、意味処理、自己関連付け処理の三つの課題を行わせた。反応時間

¹ 本研究は関西心理学会第109回大会において発表した。

² 本論文の作成にあたり御指導いただきました京都女子大学文学部教授 北尾倫彦先生に厚く感謝いたします。

と偶発再生成績を比べたところ、うつ病群においては、うつ内容の特性形容詞について自己関連付け効果がみられ、逆に健常者の場合には非うつ内容の特性形容詞においてのみ自己関連付け効果がみられた。これらの結果から彼らは、うつ障害をもつ者には、否定的なセルフスキーマが存在するという Beck の説に実証的な支持を与えたと結論づけた。

その後うつに関するさまざまな方面からの研究が発表されているが、うつに関する否定的なセルフスキーマの存在を仮定した上で、それを自己関連付け処理を用いて実証する点に関しては、必ずしも一致した結果が得られていない。この不一致の原因の一つとして、うつ病者であれば、寛解期に入って何日が経過しているか、また抑うつ気分なのか抑うつ症状なのかなど被験者のうつの程度に違いのあることが挙げられる。うつの程度とセルフスキーマの関連を取り扱ったものとしては、たとえばうつの程度の異なる被験者で自己関係付け効果が異なるかどうかを検討し、うつの程度が高くなるにつれて、否定的なスキーマが支配的になっていくとみなした研究がある (Kuiper & Derry, 1981)。また Kuiper & Derry (1982) は一般学生を被験者とし、うつ傾向が軽度の場合には、うつに関係する特性形容詞と無関係な特性形容詞の両方について自己関連付け効果がみられることを示した。

そこで本研究では、一般学生を被験者とし、自己記入式の質問紙で測定される抑うつ傾向の差によって被験者を選択した場合、自己関連付け処理でどのような差がみられるか検討した。呈示する特性形容詞については、うつ内容と非うつ内容の特性形容詞を使用し、処理課題としては、被験者間の処理効率を比較するために、形態処理もあわせて実施した。今回の実験では、日本語を用いることから、形態処理については呈示される特性形容詞に漢字が含まれているか否かについて尋ねることとした。反応時間と偶発再生成績の両面においてデータを収集し、この領域における研究に新たな実証的資料を提供することを目的とした。

方 法

実験計画 2×2×2×2 の要因計画が用いられた。第一の要因は抑うつ傾向 (大, 小)、第二の要因は処理課題 (形態, 自己関連付け)、第三の要因は特性形容詞の意味内容 (うつ, 非うつ)、そして第四の要因は被験者の反応タイプ (肯定, 否定) である。第一の要因は被験者間要因であるが、後の三つの要因は被験者内要因である。

被験者 被験者の抑うつ傾向を調べるため、女子大学生 151 名につき、YG 性格検査、および MMPI の下位検査のうつ尺度のみを用いて予備調査を行った。両検査の実施手引きに従い、講義時間を利用して集団的に実施した。各項目で抑うつ傾向を示す質問内容に

ついて、肯定反応には 2 点、中立反応には 1 点、否定反応には 0 点を与えて得点化した。その結果、全被験者の YG 性格検査 (10 項目) の平均は 10.97 ($SD=6.10$)、MMPI (60 項目) の平均は 58.11 ($SD=10.07$) であった。その中から YG 性格検査が 17 点以上、MMPI が 65 点以上の者を抑うつ傾向大群とし、YG 性格検査が 6 点以下、MMPI が 52 点以下の者を抑うつ傾向小群として各 12 名抽出した。両群間の差を検定すると、YG 性格検査では抑うつ傾向大群 ($M=19.00$, $SD=1.13$) が抑うつ傾向小群 ($M=2.08$, $SD=2.19$) より有意に高く ($t(22)=23.76$, $p<.01$)、MMPI でも抑うつ傾向大群 ($M=72.93$, $SD=6.39$) が抑うつ傾向小群 ($M=43.67$, $SD=3.85$) より有意に高かった ($t(22)=13.59$, $p<.01$)³。

刺激材料 うつ内容と非うつ内容の特性形容詞を選ぶため、まず初めに従来の研究 (Beck, Ward, Mendelson, Mock, & Erbaugh, 1961; Lubin, 1965; 青木, 1971; 桑原, 1991) を参考に、うつと非うつそれぞれにつき 50 語ずつ、合計 100 語の特性形容詞をリストアップした。心理学専攻の大学院生と学部学生計 16 名を被験者にし、これらの特性形容詞がどの程度うつ状態の人の特性を示しているかを 5 段階尺度で評定を行うように求めた。うつ内容を示すものとして選ばれた 50 語についての平均評定値は、3.13 から 4.18 の間に分布し ($M=4.03$, $SD=0.85$)、非うつ内容を示すものとして選ばれた 50 語についての平均評定値は、1.19 から 3.06 の間に分布した ($M=1.74$, $SD=0.86$)。これらの中から、平均評定値が 3.69 以上の 30 語 (“ふさぎこんだ”, “無気力な”, “気が重い”, “空虚な”, “暗い” など) をうつ内容の特性形容詞として用い、1.69 以下の 30 語 (“希望に満ちた”, “楽観的な”, “生き生きとした”, “にぎやかな”, “うきうきした” など) を非うつ内容の特性形容詞として用いた。うつ、非うつ内容それぞれ 15 語ずつ、計 30 語で一つのリストを構成し、リスト A とリスト B を各群の半数ずつの被験者に対して使用することにした。うつ傾

³ 今回の実験ではスクリーニング用に、YG 性格検査と MMPI の D 尺度を使用した。この時点で、いわゆる抑うつ性格傾向の大小による振り分けをしたことになる。そして、実験当日に SRQ-D を用いることにより、当日の抑うつ状態を調査した。抑うつ性格傾向大の可能性として 2 種類、また当日も軽度の抑うつ症状を示していたという三つの基準により、大学生というサブクリニカルなサンプルの弱点を補おうと考えた。スクリーニング時の被験者の選択については、2 種類のテストを別々に得点化し、得点順に並べていったところ、必ずしも同様の結果が得られなかった。そこで正規分布に近い分布を示した MMPI の得点を重視し、YG 性格検査は補助的に使用した。実際には各 16 名を選んだが、実験当日に欠席したものの、また明らかに実験に集中していない、もしくはデータに不備がある等の理由から、それらを除いた 12 名について分析を行った。

向の評定値、文字数、漢字の含有率については両リストで差がないように配慮した。

手続き Macintosh 社製 PowerBook 150 を使用し、大学内に設けられた実験室において、個別に実験が行われた。まず最初に、形態処理と自己関連付け処理の2種類の処理課題について各4回の練習試行を行い、キー操作に習熟させた。形態処理では、画面に呈示された特性形容詞が漢字を含んでいるか否かについて問い、自己関連付け処理では、それら特性形容詞が自分にあてはまるか否かを尋ねた。具体的には形態処理では“次に示す言葉には漢字が含まれていますか、いませんか？”自己関連付け処理では“次に示す言葉はあなたにあてはまりますか、あてはまりませんか？”と質問し、いずれの課題においても、“できるだけ素速く判断し、対応する方のキーを押して下さい”と教示した。被験者の反応タイプ（肯定、否定）と反応時間（ms）は自動的に記録されるようセットされていた。形態と自己関連付けの2種類の処理課題のいずれを先に行うか、またこれら二つの課題には、異なる2種類のリストが使用されたが、どのリストを当てるかも半数ずつでカウンターバランスされた。各課題について30試行ずつ行われ、全部を完了するのに約10分を要した。各試行では、まず最初にコンピューターの画面中央やや上に課題の質問文が呈示され、その下に特性形容詞が横書きで呈示された。特性形容詞の文字の大きさは48ポイントであった。“用意”の文字の呈示後、3sのISIをはさんでターゲットとなる特性形容詞が呈示された。被験者はコンピューターの“1”か“0”のキーを押すことにより、“肯定”または“否定”の判断を行った。刺激となる特性形容詞が呈示されてから、キーを押すまでの時間が反応時間として記録された。判断を終えるか3sの許容時間の経過後、3sのISIをおいて次の刺激語が呈示された。全課題終了後、“どのような順番でもよいので、いま呈示された言葉の中で、あなたが覚えている言葉を紙に記入して下さい”と教示し、偶発再生課題を実施した。再生時間は約4minであった。最後に、実験当日の被験者のうつ状態を調査するため、SRQ-D (Self-Rating Questionnaire for Depression) に対する回答を求めた。SRQ-Dは内科領域における軽症うつ症発見の手がかりの一つとして行われている簡易テストの一つである（筒井，1985）⁴。

⁴ 心理実験の場において、抑うつ症状を測る尺度としては他にBDIやSDSがよく用いられている。今回SRQ-Dを選んだのは、このテストが日本人向けに東邦大学で考案されたものであること、また抑うつ症状とは無関係な設問を6項目含んでいるため、被験者に抑うつの程度を測っていると気づかれにくいのではないか、という2点を考慮したためである。

Table 1
自己関連付け処理課題における被験者群別評定頻度数の平均と標準偏差

	うつ内容		非うつ内容	
	肯定	否定	肯定	否定
抑うつ傾向大群				
<i>M</i>	6.67	8.25	7.17	7.75
<i>SD</i>	3.23	3.14	4.04	4.14
抑うつ傾向小群				
<i>M</i>	1.08	13.92	12.42	2.58
<i>SD</i>	1.08	1.08	1.78	1.78

結 果

被験者群の特徴

まず初めに自己関連付け処理における評定頻度数について調べるとTable 1のとおりであった。この結果について抑うつ傾向、特性形容詞の意味内容、反応タイプの3要因の分散分析を行った。その結果、反応タイプの主効果 ($F(1, 88) = 4.73, p < .05$)、特性形容詞の意味内容×反応タイプ ($F(1, 88) = 114.88, p < .01$)、抑うつ傾向×特性形容詞の意味内容×反応タイプ ($F(1, 88) = 93.48, p < .01$) の交互作用が有意になった。他の要因の主効果および交互作用については、すべて有意差は認められなかった。次にうつ内容の特性形容詞について、肯定反応の数を t 検定にかけると、抑うつ傾向大群は抑うつ傾向小群に比べて有意に多いことが示され ($t(22) = 5.68, p < .01$)、否定反応については、これと逆の差が認められた ($t(22) = 5.97, p < .01$)。また非うつ内容の特性形容詞についてはこの関係は逆の方向での差がみられた（肯定反応： $t(22) = 4.12, p < .01$ ；否定反応： $t(22) = 4.12, p < .01$ ）。このことから抑うつ傾向大群は抑うつ傾向小群に比べて有意にうつ内容を示す特性形容詞について肯定反応を示しやすいことが認められた。実験当日に行われたSRQ-Dの得点は、抑うつ傾向大群 ($M = 14.08, SD = 3.37$) が、抑うつ傾向小群 ($M = 4.75, SD = 2.26$) より有意に高かった ($t(22) = 7.97, p < .01$)。SRQ-Dの判断基準によれば、10点以下はほとんど問題なし、10点から15点はボーダーライン、16点以上は軽症うつ症を疑ってもよいということになっている。今回の抑うつ傾向大群の結果はボーダーラインの後半に属していた。

反応時間の分析

Table 2は各個人の条件別に反応時間の平均を求め、それらの各群別の平均と標準偏差を算出したものである。抑うつ傾向、処理課題、特性形容詞の意味内

Table 2
被験者群別反応時間 (ms) の平均と標準偏差

被験者群と 処理課題	うつ内容		非うつ内容	
	肯定	否定	肯定	否定
抑うつ傾向大群				
形態処理				
<i>M</i>	587.25	593.17	567.00	583.67
<i>SD</i>	143.92	112.53	145.65	130.86
自己関連付け処理				
<i>M</i>	1397.75	1479.25	1330.75	1361.33
<i>SD</i>	244.36	280.57	353.36	290.41
抑うつ傾向小群				
形態処理				
<i>M</i>	554.00	558.75	548.58	558.58
<i>SD</i>	88.92	88.84	95.10	105.48
自己関連付け処理				
<i>M</i>	1038.00	935.67	933.00	1187.08
<i>SD</i>	344.06	265.27	324.73	299.69

容, 反応タイプの4要因の分散分析の結果, 抑うつ傾向 ($F(1, 177) = 35.70, p < .01$) と 処 理 課 題 ($F(1, 177) = 37.59, p < .01$) の主効果が認められた。さらにこれら二つの要因間の交互作用も有意であった ($F(1, 177) = 26.39, p < .01$)。他の要因の主効果および交互作用については, すべて有意差は認められなかった。二つの主効果が有意であったことから, 反応時間は抑うつ傾向大群が抑うつ傾向小群より有意に大きく, 自己関連付け処理が形態処理より有意に大きい反応時間を示したといえる。抑うつ傾向と処理課題要因の交互作用が有意であることが認められたので, 次に処理課題別に3要因の分散分析を行った。その結果, 形態処理では, すべての要因に有意差が認められなかったのに対し, 自己関連付け処理においては抑うつ傾向要因の主効果 ($F(1, 88) = 35.70, p < .01$) が認められ, 他の要因の主効果や交互作用はすべて有意ではなかった。これは提示される特性形容詞の意味内容や反応タイプの差にかかわらず, 抑うつ傾向大群は自己関連付け処理において, 抑うつ傾向小群より反応時間が有意に大きいということを示している。

偶発再生量の分析

まず個人ごとの再生項目数を求めた。その際再生の正誤判定では, 語幹が正しいものや意味上大きな差がないと判断されるもの, また漢字のミスと思われるものについては正答とみなした。したがって多少の表現上の違いがあっても意味内容が正しく伝わる場合には正答となり, たとえば“楽観的な”を“楽観的”, “元気のよい”を“元気な”, “陰気な”を“隠気な”などは正答とみなした。自己関連付け処理において, リス

ト内の特性形容詞の意味内容はうつ内容と非うつ内容が半数ずつになるようにしたが, 反応タイプについてみると, 肯定と否定の評定頻度数が異なっていた。そこで遠藤(1987)に従い, 個人ごとに再生項目数を評定頻度数で除し, 百分率に変えたものを修正再生率として求めた。Table 3は条件ごとの修正再生率の平均と標準偏差を求めたものである。しかし抑うつ傾向小群で, うつ内容の肯定反応の0個が3人, 1個が7人, それ以上が2人と極端に反応タイプにかたよりがみられた。そのため, この部分については, 表中に値を表示していない。そこで, 反応タイプ要因を取り除き, 改めて再生率を算出し直し, 抑うつ傾向, 処理課題, 特性形容詞の意味内容の3要因の分散分析を行った。その結果, 処理課題 ($F(1, 88) = 78.59, p < .01$) と特性形容詞の意味内容 ($F(1, 88) = 5.69, p < .05$) の主効果が有意であった。他の要因の主効果および交互作用については, すべて有意差は認められなかった。すなわち抑うつ傾向の違いにかかわらず, 自己関連付け処理した特性形容詞の再生成績がすぐれていること, また非うつ内容の言葉を再生しやすいということが明らかにされた。

考 察

本研究ではうつ病者ではない一般学生を被験者とし, 自己記入式質問紙で測定される抑うつ傾向の差で被験者を選択した場合, うつ内容・非うつ内容の特性形容詞の情報処理にどのような差がみられるかを検討した。

まず反応時間の結果について考察する。呈示される特性形容詞に漢字が含まれているか否かを尋ねた形態

Table 3
被験者群別修正再生率 (%) の平均と標準偏差

被験者群と 処理課題	うつ内容		非うつ内容	
	肯定	否定	肯定	否定
抑うつ傾向大群				
形態処理				
<i>M</i>	11.50	7.08	15.83	6.17
<i>SD</i>	9.93	9.64	10.62	9.24
自己関連付け処理				
<i>M</i>	35.83	31.00	40.33	37.08
<i>SD</i>	20.37	11.17	17.87	27.68
抑うつ傾向小群				
形態処理				
<i>M</i>	9.75	6.83	19.67	12.25
<i>SD</i>	12.59	10.86	15.51	17.55
自己関連付け処理				
<i>M</i>	—	26.17	36.00	35.67
<i>SD</i>	—	14.31	15.74	36.96

処理において、両群に有意な差はみられず、処理水準の浅い課題では両群に大きな差はないことがわかる。しかし自己関連付け処理について、被験者群別に反応時間をみると、特性形容詞の意味内容や反応タイプにかかわらず、抑うつ傾向大群は抑うつ傾向小群より有意に大きかった。抑うつ傾向大群は、自己に関連付けてこれらの特性形容詞を処理しようとするとき、反応時間を大きくする何らかの力が働いたと推測される。うつ病者を被験者にした Derry & Kuiper (1981) の結果では、反応時間に各群の有意差はみられなかった。セルフスキーマとして自己を考える Markus (1977) は、自己がさまざまな側面をもつ複数のスキーマが集まってできあがった一つの統合的システムであり、階層的構造をもって組織化されていると考えている。そして各スキーマの重要性は個人によって異なっているとす。一方、Sedikides (1995) は、中心的自己概念と周辺的自己概念に言及しながら、両者で気分の影響の受けやすさが異なることを指摘している。うつ病が気分障害であることを考慮すると、抑うつ傾向大群にとって、自己の気分状態に関連のあるうつ内容・非うつ内容の特性形容詞は、結果的にともに自己関連語になった可能性がある。しかしそれはうつ病者ほど中心的なものではなかった。Kuiper & Derry (1981) は、うつの程度が高くなるにつれて、否定的なセルフスキーマが支配的になっていく可能性について述べているが、抑うつ傾向大群において気分に関する次元のスキーマはそれほど支配的なものではなかった。よって、その次元が周辺的自己概念にあたり、気分の影響のバイアスがかかりやすかった。そのため、自己像に対する確信度や信憑性の欠如

から判断に迷いを生じた。一方で抑うつ傾向小群は、気分状態を表す言葉に関して、自己に対する安定的で一貫性をもった肯定的スキーマをもっている。そのため自己の気分状態関連の言葉について自己関連付け処理を行っても気分の影響を受けにくかった。また同じく Sedikides (1992) では、ネガティブ気分がポジティブ気分比べて自己焦点の注意を引き起こしやすいことを指摘している。当日の SRQ-D の結果より軽い抑うつ気分にあったと思われる抑うつ傾向大群は、抑うつ傾向小群より自己に注目しやすい状態にあり、そのために評価感情をともなったネガティブ気分が誘発されやすかった。ネガティブ気分は不安や不適合な情報に対する抵抗だけでなく、いわゆる抑うつ気分による注意資源の不足を招き、処理効率に影響を与え、反応時間を遅らせる原因の一つになったかもしれない。

次に偶発再生成績の結果について検討する。従来言われているとおり、自己関連付け処理された特性形容詞の再生成績は、形態処理されたものよりはるかにすぐれていた。そして、この自己関連付け効果は抑うつ傾向の大小にかかわらず、両群で同程度に認められた。しかし、再生された特性形容詞の意味内容をみると、いずれの群においても非うつ内容の特性形容詞の再生成績がすぐれていた。この結果も、Derry & Kuiper (1981) のものと一致しない。その原因として、初めに述べたように、うつの程度の違いを挙げることができる。Derry & Kuiper (1981) の被験者はうつ病者であり、本研究の被験者は軽い抑うつ気分であったと思われる。今回のように抑うつ状態が軽度な場合、自然な気分状態では記憶痕跡に影響を与えるほど否定的なセルフスキーマは活性化されておらず、使用

されたスキーマは、うつ傾向小群と同様、自己を多少肯定的な方向にかたよって認知するものであったのかもしれない。Rogers (1981) は、自己関連付け処理の際、認知的要因と感情的要因の両方が同時に関与し、効果を倍増させていると考えている。感情要因は処理の早い段階で注意を喚起したり引き付けたりして、その後の情報処理に注がれる心的エネルギーの量を調整する。つまり自己との関連が強いほど多くの心的エネルギーが対象の処理のために投入される。しかし処理の質はその過程に関与する認知システムの構造水準、すなわち認知的要因によって決められるとする。今回の実験で使用された特性形容詞は、自然な気分状態の抑うつ傾向大群の感情的要因には関与したが、処理の質を高めるのに十分に構造化された認知システムには関与しなかったため、再生成績にはネガティブな影響を与えなかったとも考えられる。Teasdale (1985) は、Beck の否定的な抑うつスキーマ仮説を批判的に修正することにより、抑うつ処理活性仮説を提唱している。つまり抑うつになりやすい人は、潜在的に抑うつ処理パターンをもってはいるが、それはネガティブライフイベントなどのストレスを体験して抑うつ気分が誘発されたときに限って活性化されるというのである。また、Carr, Teasdale, & Broadbent (1991) でも抑うつ気分とネガティブな自己注目による認知的負荷の両方がそろったとき、抑うつを持続が起こりやすくなることを述べている。抑うつ傾向者は、非抑うつ傾向者より抑うつ状態に陥りやすい要因をスキーマ上でもっているのかもしれない。

今後の課題として、認知、感情双方向性の相互作用を考慮しながら、抑うつ傾向者のもつスキーマの脆弱要因を探っていくことの必要性が示唆された。

引用文献

- 青木孝悦 1971 性格表現用語の心理-辞典的研究——455語の選択、分類および望ましさの評定——心理学研究, **42**, 1-13.
- ベック A. T. 大野 裕(訳) 1990 認知療法 岩崎学術出版社
- (Beck, A. T. 1976 *Cognitive therapy and the emotional disorders*. New York: International University Press.)
- Beck, A. T., Ward, C. H., Mendelson, M., Mock, J., & Erbaugh, J. 1961 An inventory for measuring depression. *Archives of General Psychiatry*, **4**, 561-571.
- Carr, S. J., Teasdale, J. D., & Broadbent, D. 1991 Effects of induced elated and depressed mood on self-focused attention. *British Journal of Clinical Psychology*, **31**, 273-275.
- Derry, P. A., & Kuiper, N. A. 1981 Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 286-297.
- 遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己心理学研究, **58**, 289-294.
- Kuiper, N. A., & Derry, P. A. 1981 The self as cognitive prototype: An application to person perception and depression. In N. Cantor & J. F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition, and social interaction*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 215-232.
- Kuiper, N. A., & Derry, P. A. 1982 Depressed and nondepressed content self-reference in mild depressives. *Journal of Personality*, **50**, 67-79.
- 桑原知子 1991 人格の二面性について 風間書房
- Lubin, B. 1965 Adjective checklists for measurement of depression. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 57-62.
- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.
- Rogers, T. B. 1981 A model of the self as an aspect of the human information processing system. In N. Cantor & J. F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, cognition, and social interaction*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 193-213.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. 1977 Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 677-688.
- Sedikides, C. 1992 Mood as a determinant of attentional focus. *Cognition and Emotion*, **6**, 129-148.
- Sedikides, C. 1995 Central and peripheral self-conceptions are differentially influenced by mood: Test of the differential sensitivity hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 759-777.
- Teasdale, J. D. 1985 Psychological treatment for depression: How do they work? *Behaviour Research and Therapy*, **23**, 157-165.
- 筒井末春 1985 心身症を診る ライフ・サイエンス

——1997. 8. 25 受稿, 1998. 7. 11 受理——